

岡倉登志著『ボーマ戦争』(山川出版社)

高 杉 玲 子

英米文学科所属の西洋史の岡倉先生が、最近、山川出版社より『ボーマ戦争』を上梓された。アフリカニストの先生は、同名の著書を、教育社歴史新書版として、1980年に刊行されているが、装いも新たに、今回、その後の研究成果を世に問われたわけである。

イギリスと主にトランスヴァール共和国に居住したボーマ人との戦争は、1899年10月に開始されてから、1902年5月まで2年半の間、続いた。その間、1901年早々にヴィクトリア女王逝去。ダイヤモンド鉱脈、金鉱脈の発見を背景とした、この南アフリカ戦争は、苦戦を強いられた大英帝国の挫折を告げるものとなったことはよく知られているが、その実態は意外に知られていないのではないだろうか。

著者は、一般書として、本書を発表した意図を次のように述べている。「世紀転換期における国際政治の動向の中でこの戦争を考察してみたいという歴史家の意志よりも、石油利権のために強引にイラクを侵略したアメリカ帝国の現実と重ね合わせて一世紀前の大英帝国の暴挙を振り返ってもらいたいからである」と。

著者のもうひとつの意図は、帝国主義の背後にある文化の問題に目配りすることであった。6章は戦争とサブ・カルチャー 7章は戦争と知識人となっている。大衆文化とエリート文化に区分けして論じられてい

る。前者は、ヨーロッパ，特にイギリスとフランス，後者はヨーロッパだけでなく，アジア，特に，インド，日本を網羅している。

この著書は，含蓄に富む力作で，文化的背景を知る上で，英米文学科の学生にも一読を勧めたい。